

『最後の願い』

人生の締めくくりの時をどこで、どのように迎えるのか。それを自分で決めることの難しさを、患者さんとの関わりの中から、いつも感じている。多くの方が病院という場所で最後の時を迎え、その神聖かつ厳粛な場面に私は立ち会ってきた。そんな時、「この方は本当にこれで良かったのか」「本当に病院で最後を迎えて良かったのだろうか」といつも自問自答した。そして、いつしか「ここに来て、ここで最後を迎えて本当に良かった」と本人もそのご家族も思っていただけのように、精一杯努力をしようと思った。

7年前、1人の男性が残された時間を故郷で過ごすために退院していった。52歳のTさんは能登半島の先端のある町に住んでいた。この町は私も学生時代に何回か行ったことがあったが、とりわけ海がきれいな町である。そんな自然に満ちあふれた、のどかな環境の中で、長年郵便局に勤めていたTさんは多発性骨髄腫の診断を受け、私たちの大学病院で抗がん剤による治療を続けていた。

この病気は、骨髄の中で異常なたんぱく質を大量に作り出すがん細胞が増え続け、そのことでさまざまな症状が出現するのだが、特に全身の骨を溶かし、そのためにあちこちに痛みが出現するやっかいな病気である。Tさんは約2年半にも及ぶ治療の結果、非常にいい状態（寛解）になったのだが、すぐ半年後にはまた再発してしまった。再び、抗がん剤や放射線照射により治療したものの、二度といい状態に持ち込めず、入退院を繰り返しながら、1997年7月に最後の入院となった。



この時は頭蓋骨にまで病変が及び、頭痛の他、しゃべりにくい、飲み込みにくいといったさまざまな神経症状がみられていた。病変はあらゆる骨に広がり、また貧血もかなり進行していた。出来得るさまざまな治療により一時的に病気の進行を遅らせることができたものの、残念ながら大きな効果は得られなかった。

9月に入ってから、出血しやすい状態に陥ったため、下血を繰り返すようになり、何度も輸血を行うようになった。同時に、異常なたんぱく質が上昇し続けるため、精神症状が出現し、つじつまの合わないような言動も見られるようになった。

ある日、Tさんは強く外泊を希望した。下血が続いている中、大きな危険を伴ってはいたが、ご家族の協力もあり、事前に輸血を行うことでなんとか実現にこぎつけたのである。外泊3日目の早朝、下血を再び認めたため、血圧が下がり、意識状態も悪くなって、救急車にて帰院した。高度の貧血であった。輸血で対処し、意識状態もなんとか回復したが、血圧も不安定であり、もう残された時間は限られていると思われた。

病院に帰ってから5日目、Tさんが急に真顔で「地元に戻りたい」と一言つぶやいた。先の外泊の希望といい、彼の思いは皆充分に分かっていた。その思いを受け、とにかく帰してあげたかった。妻を始め、ご家族も同じ気持ちであった。幸い、地元の診療所の医師も快く最後の主治医を引き受けてくださった。



その3日後、病院の車で片道2時間以上の道のりを私は妻と共に、Tさんに付き添い、無事送り届けた。Tさんの町に近づくにしたがい、車の数は徐々に少なくなり、逆に次々に自然の香りが感じられた。雑音の少ない、住み慣れた土地で、そして愛する家族に囲まれ、きっとTさんは残りの時間を気持ちよく過ごすことができることだろう、と妙に嬉しくなった。診療所に到着し、そのまま運搬用ベッドで病室へ向かうTさんは、ほっとした笑顔を見せていた。そして8日後、Tさんは静かに旅立たれた。

Tさんは、病院ではいつも笑顔を絶やさず、私たちスタッフに気を遣うような素敵な方であった。こんな笑顔で郵便配達もされていて、「町の郵便屋さん」として皆から慕われていたんだろうなあ、と自然とその情景が浮かんできた。そんなTさんが、意識が薄れゆく中で、住み慣れた町へ帰ることを望み、それが実現した。「最後はこの町で」と前から考えていたのかどうかはついに聞き出せなかったが、きっとそうだったに違いない。今まではどちらかと言えば、自分からは積極的に要望を出すことのない遠慮深いTさんが、最後にたった一つだけ思いを伝えてくれた。Tさんとの別れは悲しかった。でも、その最後の思いに応えることができたことは素直に嬉しかった。